

企業ランチョンセミナー 3

Emdogain®を応用した歯周組織再生療法の術式 — 20年間の臨床応用の実績 —

歯を失う原因の第一位は“歯周病”です。国民に“歯周病”の知識は広く認識されていますが、実際には患者さんの口の中は軽度から重度にいたる歯周病が散見されます。歯周病が進行し根尖まで骨吸収が波及した歯は保存不可能ですが、軽度から中程度の骨吸収は再生療法によって歯槽骨は元に戻ることが可能です。骨吸収がわずかの時点すなわち初期の段階で再生療法を施すことで、歯周病の進行を止め歯周組織を再生させることができます。

歯周治療の理想的な目標は、失われた歯周組織の構造と機能を完全に回復することです。すなわち再生療法とは、歯肉組織（軟組織）の退縮を最小限にして、ブローピング深さを減少し臨床的アタッチメントレベルを獲得することです。そして予後を向上するために、歯の支持組織を獲得し骨内欠損や分岐部病変を改善する治療法です。

再生療法は、1960年代初頭から現在に至るまでの半世紀の間に目覚ましい進歩を遂げ、長い歴史の変遷の中でその概念および術式は確立されてきました。今日臨床医は、歯周組織再生に関して有用とみなされる膨大な手技および材料に直面し、その結果として最も適切な手技や材料を選択することが非常に困難になってきました。それらの中で筆者は、1999年から20年間Emdogain®を使用してきました。現在までに約900症例使用しましたが、治療効果の極めて高い材料だと認識しています。日本国内での適応症は「歯周ポケットの深さが6mm以上、X線写真上で深さ4mm以上、幅2mm以上の垂直性骨欠損（根分岐部を除く）」とありますが、根分岐部病変や根面被覆に対してもEmdogain®の治療効果は大変優れていますし、海外でもその有用性は多数報告されています。更に軟組織の治癒促進、骨造成における治療効果に関しても多数報告されています。個人的には再生療法の第一選択はEmdogain®と考えています。

そこで今回、Emdogain®を用いた再生療法を成功させるための条件、適応症、器具および術式を改めて整理したいと思います。更に骨内欠損や根分岐部病変に対して効果的な使用方法を供覧し、如何にして予知性の高い治療を遂行するかを検討したいと思います。



演者

木村 英隆 先生
(医療法人 木村歯科)

・九州大学歯学部 臨床教授
・ITI Fellow
・日本顎咬合学会 認定医

・日本歯周病学会 理事・歯周病専門医・指導医
・日本臨床歯周病学会 副理事長・指導医・歯周インプラント指導医
・TCU 21 歯周治療研修会 主宰

日時

2019年
6月 22日(土)
12:30-14:00

会場

206会議室
札幌コンベンションセンター 2F

本セミナーは事前Web予約制になります。

残部について、当日、参加受付前に設置する「ランチタイムセッション申込」デスクにて、当日配布します。